

ショックメンタリー(“モンド映画”)の歴史

江戸木 純 (映画評論家)

そもそもフィルムはその発明直後から何かを記録する手段であった。そして、劇場映画以前から記録映画＝ドキュメンタリーは、観客の好奇心をダイレクトに刺激する「見世物」としての映画興行の中心であった。もちろん、ドキュメンタリーはその創世記、ドキュメンタリーの父、ロバート・J・フラハティの「極北の怪異」(22)、「モアナ」(26)やベンヤミン・クリステンセンの「魔女」(22)といった作品から、現実を切り取っただけの記録フィルムではなく、作り手の切り口による、ときにはヤラセとよばれることもある「再現」や「演出」を多分含んだ作品作りの手法であった。

そんなドキュメンタリー映画の手法を最大限に利用して製作され、世界中で大ヒットしたのがイタリアのガエルティエロ・ヤコベッティ監督が61年に発表した「世界残酷物語」だった。ジャーナリスティックというよりは見世物精神と覗き見趣味によって巧みに再現された世界各地の衝撃映像の数々は、海外旅行が今ほど自由でなかった当時の観客の好奇心を直撃し、世界中で大ヒットを記録した。以後、ヤコベッティ自身が「世界民族物語」(63)、「続・世界残酷物語」(64)、「さらばアフリカ」(65)と同傾向のショック・ドキュメンタリー＝ショックメンタリーを発表するのをはじめ、「ショック」(63)、「鎖の大陸」(63)、「世界を裸にする」(64)、「世界のはらわた」(64)、「世界顕奇地帯」(66)、「世界禁断地帯」(67)などなど、数多くの垂流作品が地球上の衝撃の真実を取材し、再現、ときには捏造した。それらのキワモノ・ドキュメンタリーは、現在「世界残酷物語」の原題「MONDO CANE(犬の世界)」のmondo(世界)から取って“モンド映画”と呼ばれている。

“モンド・フィルム”は70年代に入ってもコンスタントに製作されていたが、その後のこのジャンルを大きく変えたのはかつてヤコベッティ作品で撮影や編集を担当していたアントニオ・クリマティとマリオ・モッラのコンビが監督した「グレート・ハンティング／地上最後の残酷」(75)だった。同作におけるライオンに人間が食べられるシーンと人間が人間を狩るシーンは、それまでこの手の映画が踏み越えなかった「人間が本当に殺される」シーンを作品の売りにした。現在ではそのシーンが作り物だったことは周知の事実となっているが、この映画が大ヒットしたことで以後のジャンルは人間の死そのものを売りにすることになる。クリマティ&モッラは続けて「グレート・ハンティング2」(76)、ジープによる引き裂き刑が話題を呼んだ「残酷を超えた驚愕ドキュメント／カランバ」(83)を、モッラ単独でもカーレースで起こるクラッシュや事故を最大の見せ場にした「ボール・ポジション」(78)、「グレート・ハンティング84」(84)などを発表、さらに人間がサメに食われる「シャーク!」(76)、悲惨な事故の強烈なシーンばかりを集めた「カタストロフ／世界の大惨事」(77)、ガイアナ人民寺院の集団自殺シーンを付け足して緊急公開された「人類狂気時代」(77)、電気椅子での処刑シーンが売りだった和製ドキュメンタリー「ジャンク／死と惨劇」(79)シリーズ、飢饉地帯を追った「ハンク」(80)など、“モンド映画”は一気に過激化し、見世物の限界に到達してしまった。

そんな中登場したルッジェロ・デオダート監督のイタリア映画「食人族」(79)は、ドキュメンタリーの手法とドラマを見事に調相させ、本当か作り物かわからないいかかわしさと強烈な残酷描写で日本をはじめ各国でヒットした。同種の秘境冒険映画にはウンベルト・レンツィ監督の「怪奇!魔境の裸族」(73)、デオダート監督の「世界最後の人喰い族／カニバル」(76)があったが、失踪した取材陣が残した16ミリ・フィルムを見るという劇場映画であることを放棄したそのスタイルにおいて「食人族」は画期的だった。

しかし、80年代以後、技術の進歩による撮影機材の小型軽量化によるテレビ・ジャーナリズムの機動力の向上は、劇場映画としての“モンド映画”を駆逐してしまう。そして、この衝撃の決定的瞬間を追うスタイルは、見境なく視聴率競争を続けるテレビ界の特番やワイドショーに引き継がれていくことになる。ところが、それからさらに十数年、カメラはさらに小型となりデジタル化し、ビデオからフィルムへの変換技術も進化して、デジタル・ビデオ・カメラが映画制作にも導入されはじめると新しいスタイルの“モンド映画”が誕生した。その決定打が99年に世界的大ヒットとなったダニエル・マイリック、エドゥアルド・サンチェス監督の「プレア・ウィッチ・プロジェクト」だった。同作は「食人族」のスタイルをデジタル・ビデオで再現し、インターネットによる効果的な宣伝を使ってヒットを生んだ。以後、デジタル・ビデオ撮影によるドキュメンタリー・タッチのホラー映画が世界中に氾濫することになったが、従来の大規模な映画制作とは異質のアイデア勝負の低予算作品がハリウッドの超大作と同じ土俵で勝負できる道が開かれたことは特筆すべき事件であった。この種の成功作としては他に、今年日本でも公開されたサメに囲まれた2人の男女の恐怖をリアルに再現した「オープン・ウォーター」(03)がある。

白石晃士監督の「ノロイ」は、まぎれもなくこの“モンド映画”の新潮流の1本である。何が真実かではなく、この現実とフィクションの垣根を取り払ってしまうスタイルに身をゆだね、リアルな恐怖を楽しむべき作品なのである。

